本居宣長における『古事記』のリアリティー

大久保　紀　子

はじめに

宣長の『古事記傳』は、『万葉集』や祝詞、宣命を研究することによって得られた古語の知識と歴史書、有職故実の書などから得たおびただしい事例を駆使して『古事記』の一字一句を実証的に注釈していく。その緻密な検証は四十四巻という膨大な量におよび、脱稿まで三十二年[1]の歳月が費やされた。精魂こめた注釈作業によって、宣長は何を実証しようとしたのだろうか。

宣長が『古事記傳』によって実証したかったのは、神々の御所為（みしわざ）が現実の世界に実現しているということであった。具体的に言えば、『古事記』に記された神々の事跡が現実の世界の基盤であり、それが今も有効にはたらいているからこそ日々の生活が成り立っていること、また、それを人に即して言えば、『古事記』に記された神々のあり方が、今もなお変わらない人の真実のありさまを示しているということであった。宣長にとって『古事記』の神々の事跡ははるか昔の神話ではなく、現実の世界にはっきりと看取できる事実なのである。

『古事記傳』は、今なお『古事記』を研究する者が最初に参照しなければならない文献の一つである。『古事記傳』の実証性や『古事記傳』にあらわされている古道論については、従来も幾多のすぐれた研究が積み重ねられてきた[2]。しかし、実証性や古道論は、『古事記傳』のいわば表面をなす部分である。本稿で読みとっていきたいのは、実証的な注釈や古道論の背後に動いて、そうした作業や主張をおしすすめている宣長の根本的な動機についてである。

宣長の根本的な動機となっているのは、先に述べたように『古事記』に記された神々の御所為が現実の世界に実現しているという認識であった。『古事記』の世界がまさしく現実であることを示すために宣長は膨大にして精密な実証を積み重ね、また、『古事記』の世界がまさしく現実であることを思想化したのが古道論であった。本稿では、宣長が現実の世界を『古事記』の神々の御所為の実現であるととらえていたことを明らかにし、宣長における『古事記』と現実の世界の位相について考察する。それによって、宣長の思想構造の一端を明らかにするとともに、宣長にとって『古事記』がどれほど現実味のあるものであったかを示してみたいのである。

一　宣長の注釈の特色

宣長が『古事記』を注釈する際に言と事を一致させることを原則としていたことについてはよく論及されるところである[3]。しかし、その実証の過程で宣長の現実の生活感覚が織り込まれていることについて考察した研究はほとんどない。

宣長が一貫した方針のもとに『古事記』に訓みをつけ、精密な注釈を加えるまで、神道のテキストとして用いられていたのは『日本書紀』であるが、それまでの『日本書紀』の注釈は、後にあげる玉木正英の注釈[4]、および宣長が言及している一条兼良の『日本書紀纂疏』の注釈[5]からも明らかなように、儒教や仏教の思想構造と概念を援用した解釈であり、そこに注釈者の現実の生活感覚が反映されることはなかった。しかし、『古事記傳』では、文献に拠った緻密な実証を、宣長の生活感覚によって理解し裏づけている箇所がある。宣長にとっては当然の記述なのであろうが、読む者は、『古事記』と現実の生活感覚が同じレベルであつかわれているために奇妙な印象を受ける。

我々にとって『古事記』は、遠い昔の神話、ないしは物語であって現実と直接対照し得る内容ではない。しかし、宣長において『古事記』と現実の世界は、落差なく対照し得る同質のものなのである。こうした認識から生まれる妙に現実味を帯びた注釈は『古事記傳』、ひいては宣長の思想構造を理解する上で見逃してはならない特色の一つである。

『古事記傳』の実証の過程に宣長の現実の生活感覚や生活感情による解釈と理解が含まれているということは、宣長における実証ということの意味を考える上で非常に重要である。なぜならば、宣長が現実の生活感覚をもちだすことによって『古事記』を解釈し、理解したということは、宣長において実証ということが文献上の作業にとどまらず、現実の世界で確認できる、ないしは現実の事実であるということを意味していたことを示しているからである。宣長における実証、つまり、言と事を一致させるとは、『古事記』の事象を現実の感覚や事実の中で確認していくということにほかならない。このことを説明するために、宣長の実証の作業を具体的に以下の三つの段階にわけて考察していく。

1　言と事の即応

最初に、『古事記傳』の注釈の一大原則である言と事の一致ということを具体的な例をあげてに説明しておく。宣長にとって、言葉とことがらは即応する、ないしは即応すべきものであった。この考え方が正しく、またそうあらねばならないということは、『古事記』の原文が厳密に言と事を即応させていることによって明らかであると考えられた[6]。

たとえば、伊邪那岐神、伊邪那美神が黄泉比良坂で事戸をわたす場面で、伊邪那美神は一日に千人をくびり殺すと宣言し、それに対して伊邪那岐神は、それならば一日に千五百人を産みなすと応酬するが、伊邪那美神の言葉を『古事記』では千人ではなく「千頭」と記している。そのことについて宣長は次のように注釈している。

千頭（チカシラ）　千人と云べきを如此（カク）詔ふは、絞（クビル）につきたる言なり、同じことを次には、千人死と云に合わせて思ふべし、【書紀には産方（ウムカタ）をも千五百頭と書れたるは、いかにぞや、たゞ文に拘（カカハリ）て、古語をおもほさぬ故のしわざなり（後略）】

（『古事記傳』六之巻、全九、二五六頁）

『古事記』では、一日に千人をくびり殺すということを「千頭」と記している。くびり殺すのだから、「千人死」ではなく「千頭」なのである。宣長は、古語はそれほど言と事の一致に敏感なのに、『日本書紀』では、「千頭」とかきわけた感覚を理解せず、産むほうについても「千五百頭」と記していることを非難している。

次の例は、普通ならば見過ごしてしまう小さな言葉に時間の前後関係、および時間の経過にともなう状況の変化が反映されて言と事の即応が成っていることを読みとっている例である。伊邪那岐神と伊邪那美神の淤能碁呂島での聖婚の段は「於其嶋天降坐而（ソノシマニアモリマシテ）」という言葉で始まっているが、こ

の言葉について「二神は地上から天にのぼって再び降ってきたのだから「返降（カヘリクダリ）」というべきではないか」という質問が出された。宣長は、二柱の神は高天原に生まれた神ではないから、まずはじめに天上にのぼり、天神から国作りの大命を受けて天の浮き橋に立って淤能碁呂島を作り成した。そのあとで、天降って、淤能碁呂島で聖婚にのぞんだのだという理解に立って、次のように答えている。

答フ、初メに参上り坐シし時は、いまだ淤能碁呂島は無き時なれば、於ニ二其島一反（カヘリ）とは云うべきにあらず

（『古事記傳』四之巻、全九、一六六頁）

宣長の厳密な考え方によれば、「反降」は、以前と同様の場にかえってきた場合にのみ用いられる。言と事の即応を前提とする宣長にとって、いまだ淤能碁呂島のない時に天にのぼり天の浮き橋に立って淤能碁呂島を作り固めたあとで、その島に降った二柱の神は、「反り降った」のではない。あくまでも「天降坐而」というべきであるというのである。すぐあとの箇所で、国産みに失敗した二柱の神が淤能碁呂島から天にのぼり、失敗の理由を天神に問うた後、再び淤能碁呂島に降ったことを述べる部分には確かに「返降」とあって、『古事記』が言と事の即応に徹していることがわかる。

宣長は、「天降坐而」の一言から時間の前後関係、および時間の経過にともなう状況の変化を読みとる。天に昇っていく二柱の神のあしもとは未だ固められず、潮や油が融けあっている状態であったこと、しかし、天から地に降る時には、眼下にひろがる海原の中に淤能碁呂島が形を成して浮かんでいたことを実際に見ているかのようである。宣長にとって、『古事記』は単なる文献ではなく、現実の世界と同様に時間と空間の奥行きをそなえた立体的な世界であった。言と事を即応させるということは、そうした『古事記』の世界に入り込んで、その状況をまるで体験するかのように読むことなのである。

2　疑似体験

『古事記傳』の中には、言と事を即応させて注釈する過程で、宣長が『古事記』の中に入り込み、その事象、ないしは情景の中に立って実際にものを見聞きしてでもいるかのような説明を加えている箇所がある。宣長にとって言と事を即応させるということは、そこに記された内容を疑似体験することなのである。

たとえば、宣長は、猿田彦について記されている「背ノ長サ（セノナガサ）」という言葉をことがらに即応させて理解する過程で、『古事記』の中に入り込み、『古事記』の記述にそって視線が動いているような注釈を残している。

此ノ神の御名を、猨に似たる故とせむは、本末違ふべし、さて猨の形の、此ノ神に似たるを以て思ふに、鼻ノ長きも猨と似たり、又背ノ長サ（セノナガサ）七尺餘とあるも、俗に人の長立（タケダチ）を背（セ）といへば、只凡その長立（タケダチ）のことにもあるべけれど、若シ其義ならば、たゞに長（タケ）とのみこそいふべきに、背（セ）をしも云るは、是レも猨の如く、這居坐形（ハイヰマヽス）につきて其ノ背の長さをいふにてもあるべし、神にはさまゞくあるめれば、這居（ハイヰ）たまふとせむも、あやしむべきにあらず。若シ尋常（ヨノツネ）の人のごとく、立て坐（イマサ）むには、尻の明耀（テリカガヤク）といふも、似つかはしからぬをや、さて此神、御名につきて、十二支の申（サル）の事を引寄（ヒキヨ）せて、種々（クサグサ）の漢意をいひ、又は庚申（カウシム）といふ物を、此神なりとするなど、凡てうるさく穢（ケガフ）はしきこと、云むかたなし

（『古事記傳』十五之巻、全十、一五一頁）

猿田彦について「十二支の申の事を引寄せて、種々の漢意」で説明したり、「又は庚申といふ物を、此神なりとするなど」の牽強付会の説[7]は、宣長にとって『古事記』という聖典、つきつめていえば、神々の御所為を記す「神州の語言[8]」をおかすものと思われた。宣長はそうした読み方を批判して、一字一句そのものを、文脈の中から、その言葉が出てきた状況に

即して読みとっていこうとするのである。そのために言葉とことがらを逐一対照していくうちに、宣長は、言葉をとおして、『古事記』の語り手が見、聞きしているものをともに見、聞くという疑似体験をすることになる。

宣長にとっては、猿田彦について「背ノ長サ」と記されていることが決定的なことであった。「長」でなく「背ノ長サ」と記されているのは、語り手の目が横に長い背にそそがれていたことを示す。そこから猿田彦は猿のように「這居坐形」だったのではないかと推測され、さらに、這っていたからこそ「尻の明耀」という表現もでてくるというのである。宣長は、「背ノ長サ」という一句から『古事記』の語り手の視線をとらえ、猿田彦が這い回っている姿をともに見ているかのようである。

また、垂仁天皇の命によって「登岐士玖能迦玖木實」を持ち帰った多遅摩毛理の段では、『古事記』の言葉と彼の姿を一致させ、その姿をまぶたにあざやかに描き出して「哀の情」を共有している。多遅摩毛理がすでに崩御した天皇の御陵の前で木の実をささげもって慟哭し、亡くなる場面である。

> 擎　上には置と云て、又擎とは違へるが如くなれど、然らず、置は四縵四矛を総て云、擎るは、其内なるを執持て、擎るなり【四縵四矛を、みながらは、擎ぐべきに非ざればなり、】（中略）さてかく擎げたるにて、哀の情深きほどいよゝ知られて、今眼のあたり見るが如し、
>
> （『古事記傳』二五之巻、全十一、一四八頁）

宣長は、木の実を擎げたという行為を重く見て、ことさらにこだわっている。天皇を哀傷して木の実は無意識に高く擎げられ、声はもはや言葉にならない。多遅摩毛理の木の実を擎げもつ姿は哀傷そのものである。「哀の情」が「多遅摩毛理」という形をとって宣長の眼底に浮かび上がり、「今眼のあたり見るが如し」というほどの現実味をもって宣長に迫ってくる。

3　生活感覚による解釈と理解

宣長にとって『古事記』の世界は、このように現実味をもち、現実とほとんど同様に疑似体験し得る世界であった。したがって、その注釈に宣長の現実の生活感覚が盛り込まれても不思議ではない。

たとえば、須左之男命が数々の悪行をなす場面で、天照大御神はその悪行の一つ一つを弁護するたびに「我那勢之命如此為つらめ」と呼びかけるが、それについて宣長は次のように注釈している。

> 一ッ一ッに我那勢之命と詔ふに弟命を親愛み所思看御心の程見えて、甚も有がたくこそ、
>
> （『古事記傳』八之巻、全九、三四六頁―三四七頁）

宣長は「我那勢之命」という言葉から弟をいつくしむ姉の心を読みとっている。天照大御神と須左之男命はともに伊邪那岐神が黄泉国の穢を祓っている時に生まれた神であるから、姉弟にはちがいない。しかし、一般に我々が『古事記』を読む場合、現実の世界とは全くことなる物語として読むために、「我那勢之命」という言葉に弟をかばう姉の情を読みとることはできない。それに対して、宣長は、天照大御神の一言を現実の生活と同じレベルでとらえ、姉というものが弟に示す親愛の情によって解釈するのである。

天上の天津国玉神が、息子である天の若日子が地上で亡くなったことを知る段も現実の生活感覚によって理解され、解釈されている。天若日子の妻下照比賣の哭く声が風にのって天上にまでとどく場面である。

最初に『古事記』の原文につけられた宣長の訓みを読みやすいように表記を改めてあげ、次にその部分についての宣長の注釈をあげる。

> 故、天若日子が妻、下照比賣の哭せる声、風のむた響きて天に到りき。是に天在天若日子が父、天津国玉神、及、其の妻子ども聞きて降り来

て哭き悲しみ（後略）

（『古事記傳』十三之巻、全九、六八頁）

凡て人の死りぬるを哀みて哭には、其ノ人の此ノ世に存しほどの事などをも言つゞけ、又人麻呂が妻に後し時の歌【万葉二】に、為便乎無見妹之名喚而袖曾振鶴とよめる如く、其ノ名をも呼ゆゑに、今彼ノ哭声を聞て、天若日子が死りしことを知るなり【書紀ノ纂疏に天国玉聞ハ二其哭声ヲ一、謂フ二天耳通ヲ一、又以二父子同気ナルヲ一、諳二知二其死ヲ一也[9]とはなにごとぞや、凡て神代の故事を、漢意にて見るから、かゝる言痛説は出来るぞかし、】

（同右）

宣長の関心は、下照比賣の「哭く声」と記されているだけで天若日子が亡くなったことは明言されていないのに、それを聞いた天上の親族達が天若日子の死を知ったことをどのように説明するかという点にある。一般的にいえば、天若日子の死が天上の親族達に伝わったことは文脈の流れから、また、常識の範囲で了解されることなのであるが、宣長は「哭く声」から、なぜ死を察知することができたのかを厳密に整合させようとするのである。

宣長の説明は、人を亡くした時、人はその名を呼び、在りし日のありさまを繰り返し言い続けるものだという現実の経験的事実に基づいている。柿本人麻呂の歌もそれを裏付ける。宣長は、風にのって天上まで響くほどの下照比賣の嘆きの声を聞き、そのただならぬさまから死を察知した天津国玉神達が天上から降ってくるさまを見ているかのようである。

このように、『古事記』の言葉を現実の体験的な事実と対照させて吟味していく宣長にとって、『日本書紀纂疏』の理屈による観念的な説明は見当ちがいもはなはだしい空言と思われたのであった。宣長は言と事を即応させる過程で、『古事記』を実体験するように読む。それはすなわち、『古事記』に記された事象、状況を宣長の現実の生活経験や感覚によって確認するということであった。『古事記』は現実と対照され得る、現実と同質の世界であり、その記述が事実であることは現実において確認し得るのである。

二　『古事記』に見出される事実と真実

次に宣長において『古事記』と現実の世界がどのようにつながり、どのような位置関係にあるのかを構造的に明らかにしていく。宣長は『古事記』に示された「吉善凶悪事つぎつぎに移りもてゆ」く理[10]や「神勅の大本[11]」が現実の生活の基盤として今も有効にはたらき、また、『古事記』に記された神々のありさまが人の真実のありさまを示していると考える。『古事記』は現実に確認でき、また真実のありさまを示していることによって、現実の世界を支え、方向づけているのである。

1　『古事記』と現実の世界のつながり

宣長は『古事記』に記されていることがらが今も現実に確認できることから、『古事記』の事跡を事実であるとする。しかも、それは単なる事実ではなく、現実の生活の根拠、ないしは基盤として今も有効にはたらいていると考えられた。換言すれば、現実の世界は『古事記』に記された神々の御所為の実現であり、それなしには現実の世界は成立しえないのである。

（1）今に遺る事実

宣長は、『古事記』の内容が事実であることを次のように述べている。

又天照大御神の、皇孫命に授け給へる御霊の御鏡は、今も現に五十鈴宮にましくゝ、草薙の御剣は、熱田神宮にましますたぐひ、神代の遺跡今なほ国々に存し、又神武天皇よりこなた御代くゝの山陵なども、畿内の国々に現存し、朝廷には神代の遺事もこれかれのこり、又中臣忌部大伴などの氏々は、神代の職を相伝へて、後々までも連綿せるなど、皆その古事の実なりける明證也

（『くず花』全八、一二六頁）

宣長は、『古事記』に記された鏡と剣が遺り、また神代の遺跡が各地に残っていること、また神代の遺事が朝廷の行事として受け継がれ、神代の職を伝えている氏族が現存していることを根拠として「古事」は「実」であるとする。

重要なのは、それが、単に今もある事実なのではなく、現実の生活に直接、かつ実質的な影響を及ぼしていると考えられている点である。たとえば、宣長は、『古事記』に記されている伊邪那岐神と伊邪那美神が廻った柱が今も現実の生活に直接影響を及ぼしていると考える。

宣長の柱廻りの部分についての注釈の特色をつかむために、最初に垂加神道の玉木正英がどのように注釈しているかを見ておく。玉木正英は二神が廻った柱を土金の伝によって次のように注釈する。

柱は走らず也、不動之義也、土金にて国土の立所を柱と云、国常立尊之御慝、敬之道体也、

（『玉籤集』、二六四頁）

柱とは「走らず」ということであり、じっと身を引き締めた不動の状態を意味する。それが国常立尊の「御慝」、すなわち「敬」の完成した状態を示していると考えられているのである。

それに対して宣長は、柱の意味ではなく、この二神が廻った柱が現実にどのように遺っているかということに目を向けて次のように注釈する。

さて然廻りける柱は、女男隠寝る身屋（割注略）の中央の柱にぞ有りけむ、其故は、後世まで神の御殿造奉るに、其中央に心御柱と云を建て、殊に斎ひかしづくは、（割注略）上代よりの伝なるべく、（割注略）又今人の屋にも、中央の柱を大黒柱と云て重くすめる、（割注略）名こそ信られね、是も神代よりの夫婦のかたらひの始に廻る柱なる故に、重く崇へける、上代よりの伝はり事の、遺れるなるべければなり、

（『古事記傳』四之巻、全九、一七一頁）

宣長は、二神が廻った柱が大黒柱を重んじ、心御柱を浄めまつるという形で実際に現実の生活に遺り、柱を崇めるという慣習となって現実の生活を規定していると考える。

宣長にとって『古事記』の事跡は、それまでの注釈のように儒教や仏教の概念や構造を示すものではなく、現実の生活とひと続きにつながり、現実と直接対照され得る事実であった。

（2）生活の基盤

さらに、宣長にとって『古事記』の内容は、現実の生活の成否にかかわる事実であった。人々がそうした認識を欠いて、『古事記』をないがしろにしていることを宣長は次のように嘆いている。

目にこそ見えね此天地萬の物の、出来始めしも、又むかし今の、世ノ中の大き小きもろくゝの事も、人の身のうへ、くひ物き物居どころなにくれ、もろくゝの事も、ことごとく神のめぐみにかゝらざることはなきを、さるゆゑよしをばわすれはてて、なべての人、たゞまがつひのまがことにのみまじこり、心をかたむけて、よろづにさかしだつ人はた、からぶみごゝろを、心とはして、まれくゝに神代の御事どもを

聞きても、たゞはるけき世界の、むかしかたりをきくがごと、よそげにのみ思ひ過ごして、そは皆今のよの中、おのが身々のうへにかゝれる、本なることをおもひたどらず、（後略）

（『玉勝間』全一、二九五頁）

宣長は「此天地萬の物」はみな「ことごとく神のめぐみ」であると考える。したがって、その神々の御所為を記した『古事記』は「たゞはるけき世界の、むかしかたりをきくがごと、よそげにのみ思ひ過」すべきことではなく、「皆今のよの中、おのが身々のうへにかゝれる、本なること」なのである。『古事記』の内容は今とひとつづきにつながって、現実の生活を支え、今ここに生きるわが身の成否を左右している。言い換えれば、『古事記』の事実によってこそ「おのが身々」は保証されているのである。

宣長の天照大御神についての理解もそのことを端的に示している。宣長は『古事記』の天照大御神が太陽であり、今もこの世を照らし続けていると考える。その事実の上に、我々の生活が成り立っているのである。また、天照大御神は太陽としてこの世界を照らすだけではない。宣長は、天照大御神が下した「寶祚之隆盛當與天壤無窮者矣」[12]という勅令が「道の根元大本」[13]として、現実に有効にはたらいているからこそ社会の安定が保たれ、衣食住が保証されて日々の生活をとどこおりなく営むことができると考える。宣長にとって、今日このように生きていられることそれ自体が記紀の記述が事実であることの証しであった。『古事記』は宣長のいのちを裏打ちするほどの現実味をもっていたのである。

（3）神々の御所為の実現

見方をかえて言えば、記紀に記された「寶祚之隆盛當與天壤無窮者矣」という勅令、あるいは「汝將知国」と「言依賜」[14]という言葉が、今、現実の生活に実現しているということになる。宣長にとって現実の世界は、『古事記』の神々の言葉や御所為が実現していく世界なのである。

宣長は「古善凶悪事つぎつぎに移りもてゆ」き、ついには「全吉善に復」[15]るという「神代の理」を『古事記』から読みとるが、それも歴史の中に実現する事実であると考えられた。たとえば、宣長は南北朝の乱や戦国時代の争いが克服されて太平の世となっていることを、ほかならぬこの「神代の理」、および「神勅の大本」の実現であるととらえて、次のように述べている。

さて右のごとく、善神悪神、こもぐ事を行ひ給ふ故に、世々を経るあひだには、善悪邪正さまぐの事ども有リて、或は　天照大御神の皇統にましまし　朝廷をしも、ないがしろにし奉りて、姦曲をほしいまゝにし、武威をふるへる、北條足利のごとき逆臣もいでき、さやうの者にも天下の人のなびきしたがひ、　朝廷大に衰へさせたまひて、世ノ中の乱れし時などもなきにあらざれども、然れども悪はつひに善に勝ことあたはざる、神代の道理、又かの　神勅の大本動くべからざるが故に、さやうの逆臣の家は、つひにみな滅び亡て、跡なくなりて、天下は又しも、めでたく治平の御代に立かへり、　朝廷は厳然として、動かせたまふことなし、これ豈人力のよくすべきところならんや、

（『玉くしげ』全八、三一七頁）

「世々を経るあひだには、善悪邪正さまぐの事ども有」るが、「然れども悪はつひに善に勝ことあたは」ず、「逆臣の家は、つひにみな滅び亡て、跡なくなりて、天下は又しも、めでたく治平の御代に立かへ」った。それは「神代の道理、又かの　神勅の大本動くべからざるが故」であり、換言すれば「神代の道理」、又「神勅の大本」が現実の世界に実現しているということなのである。「豈人力のよくすべきところならんや」と述べられているとおり、宣長にとってこの世界は神々の御所為の実現する世界なの

であった。

2　人の真実のありさま

現実の世界が『古事記』の神々の御所為の実現であるということを、人に即して言えば、『古事記』に記された神々のあり方が人の真実のありさまであり、それは真実のありさまであるがゆえに、古今東西をとわず現実の人のありさまのうちに見出され、また、今も人の在るべき姿を示し方向づけているということになる。

宣長によれば、『古事記』の神々は産巣日神によって賜った「真心」[16]そのままの真実のあり方を示しており、それは今もかわらず人々に認めることができる。漢意に染められた今の人々の心から、理屈ばった考え方や体面をとりつくろう作為をとりのぞけば、「真心」という真実の心のあり方があらわれると宣長は考える。

「真心」の典型を示す一例として、妻である伊邪那美神の死を悲しんで「ひたすら小児のごとくに、泣悲みこがれ」る伊邪那岐大御神の態度[17]をあげることができる。伊邪那岐神はいとしい妻との別れを子供のようにひたすら「泣悲みこがれ」、黄泉の国まで追っていった。これこそ人の「真実の性情」、つまり「真心」であり「世人もかならず左様になくてはかなはぬ道理」[18]であると考える。この「真実の性情」を人は生来そなえており、「こちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事」[19]さえなければ、誰でもその心をあらわして真実のあり方を示すはずなのである。

倭建命が、九州の熊襲を征伐して帰ったばかりなのに父である景行天皇から東征を命じられ、父は自分を怨み自分を死なせるために東征を命じているのだと悲しみ嘆く場面でも、宣長は倭建命の「真心」に共感して「如此恨み奉るべき事をば、恨み、悲むべき事をば悲み泣賜ふ、是ぞ人の真心にはありける」[20]と注釈している。勇ましく、策謀に優れた英雄倭建命がおろおろと泣き哀しむ。その作為のない生来の「真心」は、現実に、死に直面して愛する親や妻子を思って泣く武士[21]に、また、みどりごを亡くして泣き乱れる母親[22]に見出すことができる、人の真実のありさまなのであった。

3　『古事記』の世界と現実の世界の位相

このように宣長は『古事記』の世界と現実の世界を対照させ、重ね合わせてとらえるが、二つの世界は同等とみなされてはいるわけではない。あくまでも『古事記』の世界が現実の世界の根拠を示し、現実の世界を方向づけるのである。しかし、その一方で、現実の世界の中でこそ『古事記』の世界が事実であり、真実であることが確認されるわけで、現実の世界と『古事記』の世界は常に対照され、それによって、世界や人の真実のありさまが明確に確認、ないしは検証されていくという構造となっている。

（1）「我は神代を以て人事を知れり」

宣長は『古事記』を現実の生活とひとつながりの世界と見、現実の生活と対照させて読んでいく。その意味で二つの世界は同質であるということができるが、同等ではない。あくまでも神代が現実の生活の基盤であり、人の真実のありさまを示して、現実の世界の規準となっているのである。このことを、宣長は次のように述べている。

人は人事を以て神代を議るを、【世の識者、神代の妙理の御所為を識ることあたはず、此を曲て、世の凡人のうへの事に説なすは、みな漢意に溺れたるがゆゑなり、】我は神代を以て人事を知れり、いでそのおもむきを委曲に説むには、凡て世間のありさま、代々時々に、吉善事凶悪事つぎ〳〵に移りもてゆく理は、大きなるも小きも、【天ノ

下に関かる大事より、民草の身々のうへの小事に至るまで】悉に此ノ神代の始メの趣に依るものなり

（『古事記伝』七之巻、二九四頁）

宣長は、現実の社会や人のありさまから神代をはかり定めるのではなく、神代を規準とし、そこにに現実の生活の基盤と人の真実のありさまを見る。[23] 社会の成り立ちは神代の「神勅」を大本としており、そのありさまは「吉善事凶悪事つぎ〳〵に移りもてゆく理」にすでに示されている。そして、人の真実のありさまは、産巣日神によって与えられた「真心」に求められるのである。つまり、『古事記』を読んではじめて、現実の世界の根拠、および、そのあるべき姿を知ることができる。その意味で、現実の世界は、『古事記』があってはじめて現実味を獲得するのである。つきつめて言えば、現実の世界は、記紀の世界によって裏打ちされることによってはじめて、現実となるのである。

逆にまた、記紀の世界に記されたことがらは「道の根元大本」であれ、あるいは「吉善事凶悪事つぎ〳〵に移りもてゆく理」であれ、みな今の現実の世界に実現している事実であり、記紀の神々の事跡や態度から抽出される「真心」も、現実の人の心に実際に確認することができる事実であった。こうした意味で、記紀の現実味は現実の事実によって保証されている。この双方向のはたらきによって、記紀の世界と現実とは重なり合い、ともにリアリティーを強めあうという構造をなしている。

（2） 古と現実の対照

したがって、『古事記』の事跡を現実の中に確認し、また記紀や歌物語に描かれた人のありさまを現実のそれを対照することは、宣長にとって単なる実証以上の重みをもっていた。それは、『古事記』の神々の御所為が現実に実現していることを実際に見とどけ、「おのが身にかかわる」根本的な事実を確認することであった。宣長が古の遺跡を「ものぐるほしき迄」に「たづねまどひあ」るくのもそのためである。

宣長は、安永元［一七七二］年、四十三歳の春の吉野花見行の紀行文である『菅笠日記』の中で、自身の古の遺跡に対する思い入れの深さを「ものぐるほしき迄」と表現している。十日間に及んだ旅行の二日目までだけでも、雨の名張では天武紀に記されている横川を確認し、また、長谷周辺では朝倉宮、列木宮を、倉椅では倉梯岡陵、柴垣宮をしのびながら歩を進めている。特に御陵には強い関心を示し、かつて在りしままと見える安寧天皇陵を訪れて次のように記している。

そも〳〵御陵の御ン事をしも。などかものぐるほしき迄。たづねまどひありきて。くはしうは書記せるぞと。とゞめん人もありなめど。末の代まで。いと〳〵あがりての代の物の。まさしくこれよとてのこれるは。これより外に有リなんや。ことにこのうねび山なるどもは。あるが中にもふるく。それとたしかにはたあンなれば。としごとこゝろにかけつゝ。いかでくはしく。まうでて見奉んと。ゆかしく思ひわたりつる物をや。されどいづこなるも。たゞ同じさまにて。めづらしげもなく。何の見るめしなき所々なれば。たゞおのがやうに。いにしへをしのぶ。世のひがものならでは。わざとたづね見ん物とも思ふまじければ。あなあぢきなの物あつかひやと。よの人のおもふらんを。さりぬべき事也かし。

（『菅笠日記』全十八、三七二頁）

宣長が御陵を「ものぐるほしき迄。たづねまどひありきて」、「くはしう」「書記せる」のは、「いと〳〵あがりての代の物」が「まさしくこれよとてのこれる」遺跡だからである。ことさらに尋ねてみようと思う人などいない遺跡ではあるが、「いにしへをしのぶ。世のひがもの」である宣長にとっては記紀の世界と現在が直接つながっていることを示す「それとたしか」

な証拠なのである。宣長は「としごとこゝろにかけつゝ。いかでくはしく。まうでて見奉んと。ゆかしく思」っていた御陵という『古事記』の事跡を、現実の中に確かに見ることによっておのが身のよりどころを確認するために、「ひがもの」と思われることもいとわず、「ものぐるほしき迄」に「たづねまどひあり」くのである。

三　『古事記』のリアリティー

宣長において、現実の世界は『古事記』の神々の御所為の実現であった。宣長は『古事記』の注釈作業をとおして、また、現実の世界に『古事記』の事実を見出すことによって、神々の御所為が現実に実現していることをリアルに感じ取っていく。いわゆる「安心なき安心」[24]もこの『古事記』のリアリティーが根底にあって始めて成立する。宣長は『古事記』のリアリティーによって現実の不安を克服していくのである。

宣長は三十余歳のころ、すぎゆく時のはかなさを感じ、行く末を心細く思いながら、何かひとつのことを怠りなく続けていくよりほかはないという心中を次のようにつづっている。

述懐といふ題にて

昨日はけふのむかしにて、はかなくのみすぎにすぎゆく世ノ中を、つくぐと思へば、あはれわが世も、いくほどぞや、手ををりてかぞふれば、はやみぞぢにもあまりにけり、命長くて、七十八十いけらむにてだに、はやくなかばは過ぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなきこゝちのして、心ぼそくぞおぼゆる、かくのみはかなく、こゝろなき木草鳥けだもののおなじつらに、なにすとしもなく、あかしくらしつゝ、いけるかぎりのよをつくして、いたづらに苔の下にくちはてなむは、いとくちをしく、いふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたりすくなく、つたなき身にしあれば、何事をしいでてかは、よの人にもかずまえられ、なからむ後の世に、くちぬ名をだにとゞめましと、いとゞ人にぬおろかささへとりそへてぞ、かなしくこころうかりける、さりとてはた、身をえうなき物に、はふらかしはつべきにしもあらず、かくのみつたなくおろかなる心ながら、何わざにまれ、おこたりなく、わざと心にいれて、つとめたらむに、つひにはひとつゆゑづけて、なのめにしいづるふしも、などかはなからむとあいなだのみにかゝりてなむ、

（『鈴屋集七』全十五、一二五頁―一二六頁）

三十路に入った宣長は、たとえ七十歳か八十歳まで生きようともほぼその半分がすぎてしまったことをはかなく、また心細く感じている。「かくのみはかなく」、「なにすとしもなく、あかしくらしつゝ、いけるかぎりのよをつく」すことは「いとくちをしく、いふかひなかるべきこと」であるが、「よろづにいたりすくなく、つたなき身」であるゆえに、何をすれば世間に認められ、「後の世に、くちぬ名をだにとゞめ」ることができるかと思えば、「かなしくこころうかりける」状態である。だからといって、いたづらに無用のことをなして一生を終わるべきではない。せめて、これほど「つたなくおろかなる心」でも「何わざにまれ、おこたりなく、わざと心にいれて、つとめ」れば「なのめにしいづるふしも」きっとあるだろうという何のあてもない期待をもって生きていこうと思うというのである。

「何わざにまれ、おこたりなく、わざと心にいれて、つとめ」る、それが宣長の一生であった。生計をたてるための医業も、明け暮れ書を読んで著述を進めることも、日々の生活を忠実に記録し続けることも、みな「おこたりなく、わざと心にいれて、つとめ」行われた。

それを支えたのが、『古事記』のリアリティーであったと考えられる。「は

かなくのみすぎにすぎゆく世ノ中」を「あいなだのみ」に生きていかなければならない。この不安は、『古事記』の神々の御所為が現実に実現していること、すなわち、この世界は神々の御所為が実現する世界であることを確信することによって克服される。『古事記傳』の注釈は、それを実証し、確信するための作業であった。

おわりに

宣長は、寛政十〔一七九八〕年、『古事記傳』終業を記念する会で『古事記』について次のような歌を詠んでいる。

古事の記をら読めば古の手ぶり言問ひ聞き見る如し

（『石上稿』寛政十年戊午、全十五、四九一頁）

『古事記』を読めば、古の人々あるいは神々の一挙一投足が手にとるように見え、また、言問う声が耳に聞こえてくるようだというのである。宣長の注釈の作業は、絶えずこうして『古事記』の世界を現実の世界のように体験し、現実の世界と対照することによって進められた。宣長にとって現実の世界は『古事記』の世界と重なって、神々の御所為が実現する世界であった。『古事記傳』はそのことを実証しているのである。

宣長にとって、歌を詠むこともまた、この世界が『古事記』の神々の御所為が実現する世界であることを認識し、確信するための手段であったと考えられる。宣長が生涯詠み続けた歌の意味を考察することによってそれを論証し、本稿で述べてきたことを補強できるという見通しを持っているが、それは、また稿を改めて取り組むこととする。

引用文献

本居宣長の文章は『本居宣長全集』（筑摩書房、一九六八年―一九九三年）に拠った。引用にあたって表記を改めた箇所がある。また、巻数については、全集第一巻であれば、全一と記した。

玉木正英『玉籤集』、山本信哉編『神道叢説』（ゆまに書房、一九九三年）

西宮一民校注『古事記』（新潮社、一九七九年）

坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注『日本書紀　上』（岩波書店、一九六七年）

注

（1）脱稿は寛政十〔一七九八〕年。本格的に研究を始めたのは明和元〔一七六四〕年、起稿は明和四〔一七六七〕年と考えられる（大野晋による『解題』全九、十三頁―十五頁、参照）。ここでは、宣長が寛政十年、六月十七日に荒木田久老に送った手紙に「明和四年より書きはじめ、三十二年にして終申候」（『書簡集』全十七、四二二頁）とあるのに従った。

（2）代表的なものとして、『古事記傳』の実証性の内容と性格については村岡典嗣『増補　本居宣長2』東洋文庫748（平凡社、二〇〇六年）、第弐編「宣長学の研究」の「第五章　宣長学の意義及び内在的関係」十頁以下、古道論については『増補　本居宣長1』東洋文庫746（平凡社、二〇〇六年）、第弐編「宣長学の研究」の「第四章　古道論」二八八頁以下。および相良亨『本居宣長』の第三章（相良亨『相良亨著作集4』ぺりかん社、一九九四年、三三三頁以下）参照。

（3）宣長は「抑意（コヽロ）、事（コト）、言（コトバ）とはみな相称（アヒカナ）へる物にして、上ッ代は意、事、

言も上ッ代、後ッ代は意、事、言も後ッ代、漢国は、意、事、言も漢国なる（後略）」（『古事記傳』一之巻、全九、六頁）と述べている。このことについて論じたものとしては、大野晋『解題』（全九、二五頁―二九頁）、吉川幸次郎『本居宣長』（筑摩書房、一九七七年、二四九頁―二五二頁、および二七七頁―二八三頁）などがある。

（4）二の1の（1）の引用文参照。

（5）一の3の引用文参照。

（6）以下の引用文にみる「千頭」と「千人死」の使い分け、また「天降」と「返降」の使い分けの厳密さがその好例である。

（7）たとえば山崎闇斎の『風水草』に次のように記されている。「嘉謂、朝日刺、夕日照、日向之国、猿田彦神指示処、日守木之秘訣、在二于此一矣、日待月待之神事、皆庚申之日行レ之ヲ者ハ、以レ此ヲ也、申與レ寅対シ、寅ハ則日出之方【日之少宮】申ハ則待テ二日之出ヲ一、送ル二日之入ヲ一之方也、所レ謂庚申之言ノ本矣」（『新編山崎闇斎全集第五巻』ぺりかん社、一九七八年、四一〇頁。【】は割注。玉木正英『玉籤集』、二八一頁―二八二頁に引用されている同文を参考にして、加点し句読点を加えた。一部表記を改めた箇所がある。）

（8）『あしわけをぶね』全二、三五頁。

（9）一条兼良『日本書紀纂疏』、真壁俊信校注『神道大系　古典註釈編三　日本書紀　註釈（中）』（神道大系編纂会、一九八五年）、二八七頁。

（10）『古事記傳』七之巻、全九、二九四頁。

（11）『玉くしげ』全八、三一七頁。

（12）みずからの子孫である天皇の永遠なる統治を保証する言葉（坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注『日本書紀　上』岩波書店、一九六七年、一四七頁）。

（13）『玉くしげ』全八、三一〇頁。

（14）天孫に日本を領有し支配することを委任する言葉（『古事記傳』十五之巻、全十、一四一頁）。

（15）『古事記傳』七之巻、全九、二九五頁。

（16）「うまき物くはまほしく、よききぬきまほしく、よき家にすままほしく、たからえまほしく、人にたふとまれまほしく、いのちながゝらまほしくするは、みな人の真心也」（『玉勝間』全一、一四五頁）。

（17）該当する箇所は『古事記』で次のように記されている。「「愛しきあがなに妹の命や。子の一つ木に易へむとおもひきや」とのらして、すなはち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きましし時に、御涙に成りませる神の香山の畝尾の木本に坐す、名は泣沢女の神ぞ」（『古事記』、三五頁）。

（18）以上、『玉くしげ』全八、三一六頁。

（19）『玉勝間』全一、四八頁。

（20）『古事記傳』全十一、二一九頁。

（21）『あしわけをぶね』全二、三六頁。

（22）『石上私叔言』全二、一五三頁。

（23）一の2の猿田彦についての引用文の最初の部分で、宣長は、猿田彦という名は猿田彦が猿に似ているからそう呼ばれていると考えるのは本末転倒で、猿田彦がもとで、猿が猿田彦に似ているから猿と呼ばれるのだと述べている。これが「神代を以て人事を知」るという理解の仕方の端的な一例である。

（24）相良亨『本居宣長』（『相良亨著作集4』ぺりかん社、一九九四年、四一〇頁）参照。宣長は、天地の道理や、人が生まれてくる道理、また、死後どのようになるのかといった問題について人の知恵によって説明し、それによって安心を得ることを漢意としてしりぞけた。宣長は、そうした「小手前の安心」（『答問録』全一、五二六頁）はないと

考える。なぜならば、現実の世界が神の御所為になるものであり、それが「全吉善」に帰することが『古事記』に示されている以上、人のなすべきことは、すべてを神にゆだねて「穏(オダヒ)しく楽(タヌシ)く」（『直毘霊』全九、六二頁）過ごすこと以外にないからである。安心は「小手前」で作り出すまでもなく、すでに保証されている。